

単言語使用者の個人言語管理

—多言語使用者の個人言語管理との比較から—

石田 由美子

要 旨

個人の言語管理は、国・政府が行う言語政策に大きな影響を受けることは免れず、多言語が日常的に使用されている国・地域に住む個人と、主に一つの言語が優勢な国・地域に住む個人は、それぞれに違った規範をもって言語管理をしていると思われる。本稿では石田(2006)で考察した個人言語管理の概念および個人言語管理における多言語使用者の規範についてさらに深く考察するために、日本社会における日本語母語話者を単言語使用者の例として調査し、特に席次と習得についての規範に焦点をあてて分析を行った。その上で多言語使用者の規範と比較し、単言語使用者の個人言語管理の特徴について考察を行った。

【キーワード】 単言語使用者、多言語使用者、個人言語管理、席次管理、習得管理

1. はじめに

内部に多くの言語を抱え、日常的に多言語が使用されているシンガポール、マレーシア、フィリピンなどの多言語社会では、国や政府、団体としての言語管理が席次の管理を中心に盛んに行われてきた。そのような社会においては、個人もまた多言語使用者が多く、国や政府が行っている言語管理と同様に言語の席次などに注意を払った言語管理(=個人言語管理)を行っている(石田 2006)。一方、日本社会は井上(2001)でも述べられているように、日常生活だけでなく専門分野にいたるまで日本語でまかなえる社会であり、個人も日常の生活で日本語の支配が優勢な単言語使用者(2.3 参照)が多いと言える。

個人言語管理の概念および個人言語管理における多言語使用者の規範については、すでに石田(2006)で考察しているが、本稿では、日本社会における日本語母語話者を単言語使用者の例として調査を行い、単言語使用者の個人言語管理における規範について考察を行うことを目的としている。さらに多言語使用者の規範と比較対照することにより、単言語使用者の個人言語管理の特徴を明らかにするだけでなく、個人言語管理の概念をより明確にしていく一つのアプローチとしたい。

2. 研究の背景

2.1 個人言語管理

「個人言語管理」とは、個人が言語に関して何を問題とし、さらにその言語問題にどのように対処しているかを総合的に表している。個人言語管理の類型としては、石田(2006)で席次管理、実体管理、普及管理、習得管理、世代差についての管理、民族とその文化

についての管理、と6つの類型を挙げている。これらの類型は従来、言語政策の研究で使用されてきた枠組みである席次計画、実体計画、普及計画(渋谷 1992)、習得計画(Cooper 1989)を参考にしたものである。本稿では上述の6つの管理のうち特に席次管理、習得管理に焦点をあてる。個人言語管理における席次管理とは、個人がどの言語とかかわっていくか、さらにそれらの言語に対してどのような機能を与えていくかという管理を意味する。また習得管理とは、席次管理の対象となった言語に対して、どの言語をどう習得またはどこまで習得するか等の習得に関する管理を指すものである。

この類型を枠組みとして使用することによって、個人の言語に対する意識、すなわち個人がどのような言語を席次管理の対象とし、対象とした言語に対してどのような意識を持っているのか、またどのように習得していくかについての意識や態度などを探ることができると同時に、そのような個人の言語管理が国・政府レベルの言語管理とどのように影響しあっているのかがより明確になると期待できる。

2.2 日本の言語管理

日本における国・政府の言語管理は、日本語の実体管理を中心に行われてきた。日本語が日本の国語であることにほとんど議論は見られず、その意味で席次管理が活発であったとは言えない。日本の戦後の国語政策は国語審議会、文化審議会が担ってきたが、審議会が答申もしくは建議をした分野は、現代仮名遣い、当用漢字表、ローマ字つづり方の単一化について、常用漢字表など(野村 2006)であり、もっぱら日本語の実体についての管理が行われてきたと言える。

国・政府による席次管理や実体管理は、教育システムを通して実現されることが多いが、その基本は文部科学省が告示する各学校と各教科で実際に教えられる内容とその詳細を記した学習指導要領による。学習指導要領は戦後すぐの時代から少しずつ変化しているが、小学校、中学校、高等学校を通して「国語」が必修であることは変わっていない。外国語については、今回の調査協力者(50代)が教育を受けた時期である1960年前後の学習指導要領では、中学校の選択教科の外国語は、英語、ドイツ語、フランス語その他の現代の外国語のうち1ヶ国語を第1学年から履修することが原則となっている。高等学校については、英語A、英語B、ドイツ語、フランス語からの選択とされている。

時期により若干の違いはあるが、いずれにしても日本では、国語(以下日本語)を教育言語として、外国語を除く教科が日本語を用いて教えられていると言えよう。国・政府の言語管理、すなわち言語政策の枠組みから言えば、席次管理においては日本語が第一位の座をしめ、二位を占める言語としては英語、ドイツ語、フランス語、その他の言語が挙げられる。習得管理としては、教科としても教育言語としても使用されている日本語については一貫して強い管理が行われており、英語は実質的な第一外国語としてかなり強い管理が行われていると言える。そして日本語についてはその実体管理、たとえば仮名遣い、漢字の書き方など、は教育システムを通してかなり強い管理が行われていると言えるであろう。

2.3 本稿の前提と単言語使用者

石田(2006)では、シンガポール、マレーシア、フィリピンの東南アジア3カ国での多言語使用者を調査協力者としたインタビュー記録を言語管理理論を用いて分析し、「個人言語管理」の概念の構築を目指した。この場合の多言語使用者とは、日常的に2言語以上を使用して生活している個人を指している。石田(2006)では結論として個人言語管理の概念を7点挙げたが、そのうち本稿にかかわるものが以下の4点である。この4点は、多言語使用者の調査結果を基にしたものではあるが、使用言語の数等にかかわらず、個人言語管理の基本的な概念として考察した結果得たものである。

【個人言語管理の概念】

1. 言語管理における問題の範囲は、言語の席次、実体、普及、習得、世代差、民族差まで幅広く、個人はそれぞれにおいて規範を持ち、問題が生じた場合にはプロセスの形をとった管理を行っている。
2. 個人言語管理には、管理への態度(積極的、消極的)、管理の範囲(全体的、部分的)、管理の強さ(強い、弱い)、管理の主体(社会全体が一次的、自身が一次的)などの点で、管理に幅があり柔軟性がある。
3. 個人言語管理は、他のレベルの言語管理(国・政府、地域、教育、家庭など)から影響を受け、また他のレベルの言語管理に影響を与える。
4. 個人言語管理には国や地域、民族、世代、時代による差がある。

言語管理理論における管理プロセス(ネウストプニー 1995)は、①規範からの逸脱、②留意、③評価、④調整計画、⑤調整実施という5つの段階で構成されている。個人はそれぞれが規範をもち、その規範に照らし合わせて問題が生じた場合、管理プロセスを通して言語問題の解決を図ろうとする。石田(2006)では、上記の「個人言語管理の概念」を前提とした上で、概念の1で述べた規範について、多言語社会における多言語使用者に共通すると思われる規範を7点挙げている。その中で本稿に関係する席次管理、習得管理についての規範は以下にあげる5点である。

- ①英語は重要で、当然習得されるべき言語である(席次管理)
- ②言語はそれぞれに社会的な機能がある(席次管理)
- ③複数言語の習得(習得管理)
- ④言語の習得は特に困難ではない(習得管理)
- ⑤それぞれの言語について習得の度合いについての目安を持つ(習得管理)

個人言語管理の概念の1では、個人は言語について問題が生じた場合プロセスの形をとった管理を行うとしているが、個人にとって何が問題であるかはそれぞれの持つ規範による。したがって概念の3、4を前提とすれば、上記①～⑤の多言語社会の多言語使用者の規範と日本社会の日本語母語話者とは異なる規範をもって管理を行っていることが予測できる。特に②、③、⑤については多言語社会ならではのと思われる点であり、2.2で述べた日本社会における個人の規範としては成り立ちにくいと思われる。

そこで本稿の調査協力者である日本社会における日本語母語話者を、多言語使用者と対照する意味で、「単言語使用者」と名付けた。日本社会は井上(2001)でも述べているように、日常生活だけでなく専門分野にいたるまで日本語でまかなえる社会であり、日本語のみ、もしくは日本語の使用が支配的な個人が多いと思われるからである。ただし、この場合の単言語使用者とは、前述の意味においてであり、他の言語を使用しないという意味ではなく、また個人の言語能力とは関係していない。

2.4 予備調査とその結果

2.3で述べたように、多言語使用者の個人言語管理の規範と単言語使用者のそれは席次や習得の管理において異なると予想された。そこで、予備調査として日本語母語話者である20代学生64名に言語についてのアンケート調査を行い、そのうち5名に半構造化インタビュー²を行った(石田2007)。ここで20代を対象としたのは、石田(2006)での調査協力者の年齢を考慮したためである。石田(2006)では、対象3カ国の国・政府レベルの言語管理が1970年頃を境として大きく変化したため、その変化の前後ということで20代、50代を調査対象としている。2.2で述べたように日本の国・政府レベルの言語管理、特に席次については大きな変化はないが、多言語使用者との比較を考慮して年代を合わせ、本研究も20代と50代を調査協力者として設定した。その上で、傾向をつかむためのアンケート調査への協力者が得られやすいことを考慮して、まず20代を対象とした予備調査を行った。2.3で挙げた多言語使用者の規範に対する単言語使用者の意識の違いをまとめたものが表1である。

表1 多言語使用者の規範に対する単言語使用者の意識(20代予備調査)

管理の種類	多言語使用者の規範	単言語使用者の意識
席次管理	①英語は重要で当然習得されるべき言語である	<ul style="list-style-type: none"> ・英語の重要性は全員が認識 ・授業以外で積極的に英語等の学習をしているのは少数
	②言語はそれぞれに社会的機能がある	<ul style="list-style-type: none"> ・自身の言語がほとんどすべての社会的機能を果たしている ・日本語だけを使用して困ったことがある(有:33人 無:31人)
習得管理	③複数言語の習	<ul style="list-style-type: none"> ・学校で英語をなどを習っているものの、日常的に使えるという意識が薄い ・実際に使用する機会や必要性が少ない
	④言語の習得は特に困難ではない	<ul style="list-style-type: none"> ・言語の習得は困難である とても難しい:26人 難しい:33人 普通:3人 易しい、とても易しい:各1人
	⑤それぞれの言語について習得の度合いについての目安を持つ	<ul style="list-style-type: none"> ・言語を習得することとは、 話すこと:6人 話して聞くこと:20人 読み書き話し聞くこと:38人

20代を対象とした予備調査の結果は多言語使用者の規範に対して意識の差が見られたが、英語についてはまだ学校教育を受けており、習得行動が学校以外に広がらない等の影響が見られたため、学校教育から離れなおかつ多言語使用者の調査協力者とも同年代である50代を対象を広げて再度多言語使用者との比較を行うこととした。

3. 調査の方法と調査協力者

調査は、予め用意した質問を用いて行う半構造化インタビュー方式をとり、2007年8月に男女(夫妻)各1名に、9月に2名(いずれも女性)、計4名に対して行った。調査協力者については表2にまとめた。2.4で述べたように調査協力者はいずれも50代後半の日本語母語話者であり、日常生活ではほとんどの場合日本語を使用している。半構造化インタビューで使用了質問は石田(2006)で用いた質問とほぼ同様であり、インタビューで得られたデータは文字化をした後、石田(2006)で使用了項目別に分類した。本稿ではそのうち特に日本語以外の言語に関する席次と、言語の習得に関するデータを取り上げ、分析を行った。

表2 調査協力者

調査協力者	年齢・性別	学校教育で習得した言語	学校教育以外で習得した経験がある言語	備考
Jm51	50代男性	日本語、英語	英語	20代に仕事上、英語を使用する
Jw52	50代女性	日本語、英語	英語	アメリカに1週間程度旅行
Jw53	50代女性	日本語、英語	英語、フランス語、ポーランド語、ロシア語、中国語、	国際交流活動に参加 高知、鹿児島に住む
Jw54	50代女性	日本語、英語	英語、フランス語、韓国語	20代でヨーロッパを1年半ほど旅行

*調査協力者のJは日本を、次のmは男性wは女性、次の数字の最初の5は50代、最後の数字は通し番号である。

4. 単言語使用者(50代)の個人言語管理

2.4の表1で示した多言語使用者と単言語使用者の席次と習得管理における規範の差について、50代の調査についてもインタビュー記録から席次および言語の習得について述べていると思われる発言を取り出し、調査協力者がどのような意識を持っているかを分析した。

4.1 Jm51の場合

Jm51は鉄道会社に勤務している50代の男性である。ずっと日本で育ち、日本語を使用

して生活している。30 年近く前によく外国人が来る駅に勤務し、その時に英語に親しんだ時期がある。例 1 は、その時のことについて話した Jm51 の発言を抜き出したものである（I は稿者の質問）。

（例 1）

I : それ、どういう英語なんですか。

Jm51 : えー乗り換えの案内だとか、どこまでいくらだとか。（中略）最初はやっぱりドキマギしましたよね。まだ、見ただけでもう、もう壁ができるような。でもだんだん慣れてきましてね。あの一、行き先とか、ね、トラックナンバー スリーとか、ツーとか。その程度の会話ですから。

I : どうやって覚えていったんですか。

Jm51 : 周りの先輩がしゃべっているのを聞いて、それで、そう言うんだなって。（中略）（マニュアルとかは）当時はない、なかったですね。もう先輩のやるのを見て、それで覚えて、答えるとか。で、わからないのがあれば先輩に聞く。

I : どれくらいの頻度であったんですか。

Jm51 : 1 日、1 回か、1 回程度でしたかね。

（中略）

Jm51 : あ、いつとき、ですからその、入社した当時は、あの一、学校で習った、あの一、なんていうんでしょう、英語の文法はぜんぜん役に立たないなあってのが、初めての実感。単語だけ知ってれば通じるよねっていう。そういった感じですよ。学校で例えば、今何時ですかって言うのを、教科書どおりいけば what time is it now? とかっていうけど、実際のそういう場面に行くとか、what time とか、それだけで通じちゃいます。ね。

（中略）

Jm51 : だから、いつとき、だから、英語必要だなって感じて、私には兄貴がいましたんで、本棚のなか見たら『日常英会話』なんていう本があったんですけど、ペラペラっと見て、少しは覚えたんですけど。

I : その駅にはどれくらいいらっしゃったんですか。

Jm51 : えーっと、その駅には実質何年くらいだろう。半年くらいですかね。

I : 英語の勉強は、それから。

Jm51 : 必要もなくなってるし、しゃべる機会もなくなってるからね。だんだん遠ざかって。

Jm51 の発言からは、外国人が多い駅に勤務していた当時、英語が Jm51 の席次管理の対象となっていることがわかる。個人言語管理における席次の管理とは、2.1 で述べたように個人が、自身の使う、あるいは使いたい言語の中からある特定の言語に特定の機能を与えていくことを意味する。この時期、Jm51 は自身の中で、英語に対して仕事上使用する言語という役割をもたせ、教科書どおりではなく通じる英語を話していくという実体の

管理や、勤務外でも自分で勉強するなど習得の管理を行っていた姿勢がうかがえる。

一時は英語を使用する機会もあった Jm51 であるが、その後勤務地が変わると、仕事上で英語を使用するという機会は失われてしまう。しかし、その後子供のホームステイ先であったアメリカに行く機会があり、ホームステイ先の家族と話すという目的から英語を再度意識している。そのときの気持ちを述べたものが例 2 である。

(例 2)

Jm51：やっぱりね、英語を、英会話ができればもっと自分の気持ちを伝えられるんだなって、ていうことで、習おうかなって気持ち、芽はすこしはでましたけどね、それ以上発展してないんですけど(笑)。だから、言語って、あの、なんていうのかな。例えば赤ん坊で生まれてきて、そのまま日本語なら日本語の生活の中に入っていれば、それが自然と入ってくるじゃないですか。それと同じで英語のやつをずっと聞いてればわかるのかなっていう。(中略)それが生活の中に入っちゃえばね、日本語だって、こうしゃべりなさい、じゃなくて、普段の生活の中でね、だんだん身についてきてしゃべれるって感じですから。そんな感じですから一日 3 時間くらい、英語をこうなんでもいいから聞いてれば、身につくんじゃないかな、って考えはあるんですけどもね。それ以上は発展しないね。

(例 3)

Jm51：こっちへこんどホームステイしてくださいって呼びかけしてるから。(中略)その後それに対して何もアクションはしてないんだけど。

(例 4)

Jm51：年齢、年齢をまず頭の中に思い描いている。でも、まあ、それが逃げ口上、逃げのあれなのかなと思いますけど。習いたいけど、難しいのかなってのがあります。

Jm51 は 20 代で一度、英語を実際に使用するという体験をしている。しかしこの体験は一時に止まり、その後は日本語がほとんどすべての社会的機能を果たしているという環境の中で、特に他の言語の習得は必要とならなかった。Jm51 の一連の発言からは、外国語(英語)はその機能を発揮する機会が失われるとともに、習得の管理も行われなくなっている様子がうかがわれる。しかし、他の質問に対して「これからの人には当然必要でしょうね」との発言があることから、英語は重要で、当然習得されるべき言語であるとの意識は持っていると言えよう。

また習得については、例 2 で述べているように以前の経験から習得方法(大量に、実際に(自然に)、聞く)に対する弱い意識が感じられ、同時に習得への意欲はあるが、例 4 の発言では年齢的に難しいという気持ちがあるため、実際の習得行動にいたってはいないことが述べられた。

4.2 Jw52 の場合

Jw52は特に外国語に接することのない職場で働いてきた経験を持つ50代の女性である。Jm51の配偶者で、同じくずっと日本で育ち、日本語を使用して生活している。学生時代に感じた外国語(英語)についての発言を抜き出したものが例5と例6である。(Iは稿者の質問)。

(例5)

Jw52：あのね、やっぱりねえ。英語ができたらいいなあ、会話ができたらいいなあっていうのはいつも心に持っていました。

I：それはいつごろですか。

Jw52：高校のとき。(中略)でもやっぱり、でもその時にはまだ、私はね、私はまだ外人さんに対する恐怖感があったんです。怖いっていう。子供みたいなんですけども。怖いって言う思いがあったから。口をね、口を開いてみたいんですけどね、こんにちは、とか good morning とかなんとかってね、ちょっとした会話がね、やってきた言葉を思い出して、話してみたいなと思っても。私はちょっと勇気がなかった。

(例6)

Jw52：そのものが怖い。(中略)その怖さもあったんだろうけど、それよりもなによりも、人間的な怖さがありましたね。

Jm52が一番英語に接する機会が多かったのは、中学、高校、その後の幼児教育の専門学校においてである。学校教育以外では、ほとんど他の言語には触れていない。例5, 6では英語という言語が、異文化、自身と異なる人々との結びついていることが強く意識されている。しかし一方で、英語という言語については常に頭の中にあったと述べていて、英語に関してはずっと弱めの席次管理が働いていたといえる。このような弱い席次管理があるきっかけから次に挙げた英語の習得へと結びついたようである。その後、子供がホームステイをした家族を訪ねるアメリカ旅行の前での経験を述べたものが例7である。

(例7)

Jw52：(前略) 私たちが2002年の8月でしたから、その5月か6月かその辺にちょうどね、あの、新聞の中のチラシにね、あの一、△△駅ってご存知ですか、あそこに、えーと◇◇短大、そこで短期でね、英語のあの、そういう講習をやってくれるっていう。やはりね、行ったら日本の先生でしたけども。英語がね、こう、わかりにくい英語の先生で。イギリス英語っていうんですか、なんかこう普通の英語じゃない。で、安易だったんですよ、考えが。行けば絶対こう何かしら話せて、そのホームステイに役立つと思って。(中略)だからほーんとにね、ま、子供じゃないですけど、自分が興味を持って、好きならどんどんやったと思うんですけど、それほどもう私たちの人生、塾もなかったし、平々凡々と、普通に、努力もせず、ほんとです。なんか今振り返

ってみるとね、もっとね、やっとならばよかったなと思ったりするんですけど、でもあの頃ね、やる気が起こらなかった、何かあったんだと思うんですけど。

Jw52 は、学校教育の場から離れて以来、日本語以外の言語との接触はほとんどなかったと述べているが、実際に習得行動を起こした際の態度はかなり積極的である。それは、実際にアメリカに行って、子供がお世話になったホームステイ先の家族と交流する、という具体的な場面設定がなされた場合であった。その後は、特に英語の習得を行ってはいないと述べている。

また習得の動機については、「興味を持って、好きならどんどんやっと思ったと思う」と述べている。ずっと日本語で暮らしてきて特に不便も感じていないと述べている Jw52 にとって、その他の言語は必要性よりも、自身の興味によって席次管理の対象となるものであり、習得するものであると思われる。特に日本語以外の言語の必要性を感じていなかったという点については、最後に挙げた Jw52 の例の後に、隣にいた Jm51 が同意し、「そういう環境じゃなかったからね、必要だっていう環境じゃなかったから。」と述べていたことからもうかがわれる。

4.3 Jw53 の場合

Jw53 は 20 年ほど前に高知県に約 6 年間、鹿児島県に約 1 年間住んだ経験を持つ 50 代の女性である。アメリカへの旅行経験はあるが、ずっと日本で育ち、日本語を使用して暮らしている。しかし行動範囲が広く、異文化交流事業などで日本語非母語話者との接触は多い。例 8 と例 9 は、Jw53 がどのような日本語非母語話者とどのように接触していたかを述べている部分である。(I は稿者の質問)。

(例 8)

Jw53：フランスにずっと憧れがあって、大学に入って早速フランス語をとったの。でも文法だけだったので、次第に熱が入らなくなっちゃったのよ。で、やっぱり会話だわと思って大学の時アテネフランスに 3 ヶ月。先生はフランス人。

(例 9)

Jw53：最初地方にいったのは高松で。中国語。香川大学の公開講座で。ひまでしょ。何か勉強しなくちゃ。で、フランス語なかったの。中国語。なんでだったんだろうね、あの時。あのね、10 回くらいだったの。1 週間 1 回で。3 ヶ月だったかもしれない。何かやりたいって思って。で、曜日と何かがあったんだと思うわ。面白かった。でも、そのときにも中国語をかじった知識として、そんなんばっかりよ。人に話すのに知識として、へー、中国語って四声があるのよ、って知識として私の中に蓄積して、知識としてよ。あーっでもよ、あー、あー、あー、あーってね、私のあなた、おしゃべりの種になったの。そうしてあまりにも難しくて。

Jw53 は高松で英語を習っていて、このときの英語学校の日本人の先生が高松市の国際交流事業を熱心に支援していたため、異文化交流事業などに頻繁にかかわるようになる。次の例 10 で述べているポーランドの女性もその関係から紹介されている。

(例 10)

Jw53：ポーランドの女性ってのは、共同通信の記者の方の奥さんだったの。彼女はまだポーランドから来たばかりだったの。彼女は 1 年間大阪にいたのね。そのとき日本語学校で日本語勉強したの。で、誰かいないってことになって、暇があれば彼女と会ってたの。(I：何語で話していたんですか。)日本語。彼女はポーランド語とロシア語しかできないから。そういえばロシア語勉強したわ。(中略)それが私の原点かな。だから、絵描いたり、ちょっと待ってって言って辞書ひいたり。彼女はロシア語と日本語。私は日本語だけよ、もう。

Jw53 は、表 2 でも示したように、多くの言語に接した経験を持っている。接触した日本語非母語話者は英語母語話者だけではなく、また言語に対する関心も英語だけであるとは言えない。初期にはフランス語に興味があったが、高知でその習得の機会がないと知ると対象を中国語に変えている。このような Jw53 の発言から、Jw53 の席次管理の対象は、特定の言語が最初から決まっているわけではないと思われた。その時点で必要になったもの、または興味を持ったもの、場面場面で必要になった言語が席次管理の対象となり、ある程度は習得の管理まで行われている。Jw53 の席次管理は柔軟で、対象となる言語はかなり幅があり、またそれら言語に対する管理は比較的弱いといえる。

Jw53 の席次管理の対象言語についての幅は広いと述べたが、配偶者が英語をよく使用する職場にいることから、英語は常に身近な存在であることも確かであり、高松では一家 4 人で英語を学習している時期もあったと述べている。英語に対する態度や意識を述べているのが次の例 11 と例 12 である。

(例 11)

Jw53：英語はもうあんまり電話でも怖くなくなったから。高松の経験だけじゃなくて。話せなかったら慌てなくっていいって度胸ができた。前だったら、電話かかってきても「ど、ど、どうしよう」って感じ。でも今それがなくて、「Hi, just a moment」で、「電話よ」って感じでゆっくりと言えればいいなって。

(例 12)

Jw53：怖くないって。わからなくて当たり前だって。やっぱりいろんな人にあって、言葉ってのは、ほら、話せなくて当たり前よっていうかね。みんな日本に来ていっしょうけんめいやってるし、自分もやったけど。もう聞いただけでできどきするようなことはなくなったの。この 10 年くらいでしょうかね。

Jw53 にとって習得した程度が高いと思われる言語は英語であるが、この習得について

のJw53の意識も、〇〇語を習得しなければならない、といったような習得すべき言語や、習得の方法に意識があるというよりも、習得すること事態の意義や態度により注意が払われていると言える。多くの言語に接してきているが、特に複数言語を習得する方がよいとか、特に英語だけを共通語として意識している態度も発言も、今回の調査では見られなかった。また言語の習得は困難である、といった意識よりも、「わからなくて当たり前」といった意識を持ち、言語よりも言語以外のコミュニケーションにより重点が置かれていた。しかし、これはJw53が主婦という立場で日本語非母語話者と交流を図り、絵や料理など実際の行動を通じて交流していることが大きく影響していると言えるだろう。Jw53の目的は仕事やビジネスの交渉など書類やメールなどを使うコミュニケーションにあるのではなく、行動をともにしてコミュニケーションを図ることにあると思われるからである。

4.4 Jw54の場合

Jw54は20代にヨーロッパを1年半ほど旅行した経験を持つ50代の女性である。Jw53とは別の意味で多くの言語に触れているといえる。旅行の経験は多いが、日本で育ち、普段は日本語を使用して暮らしている。英語は関わった期間が長く、言語にも異文化にも強い興味を持っている。以下に挙げる例13、14、15は、Jw54が英語と自身の経験を述べている部分である。(Iは稿者の質問)。

(例13)

Jw54：むかしちょっとうろうろとしていたことがあったので、ヨーロッパを。イタリア3ヶ月、フランス3ヶ月 スペイン1ヵ月半くらいかな、ギリシャ1ヶ月、デンマーク2ヶ月くらい。ドイツ2週間かな。転々としていました、お友達と。

(例14)

Jw54：ネイティブの人に習ってました。英語をですね。ヨーロッパをうろうろした親友と。

I：そのときの目的は何ですか。

Jw54：話したいからでしょうね。英語専門学校に行って。

I：どうして英語の学校、選ばれたんですか。

Jw54：海外に出ようと思ったんですよね。そこで英語だけ。毎日。共通語として、英語を。

Jw54：英語ができればどこに行っても困らない。

(例15)

Jw54：途方にくれるのは、ギリシャ。あの、ギリシャとかタイとか、字が違って、とっかかりがないところは、本当に困りましたね。でも英語が通じたのでよかったですけど。

Jw54 の席次管理については、英語がかなり強力に入っていると思われる。もともとフランス語にも興味があったと述べているが、ヨーロッパに旅行に出ようとしたときに、「英語」を「共通語」としてとらえ、習得を行っている。実際、Jw54 の英語の習得度はかなり高いと思われ、以前は英語の教師をやっていたとも述べている。しかし、現在は、他の言語（韓国語）への習得にも興味が向いている。それが以下にあげる一連の発言である。

(例 16)

Jw54：小学校くらいから小学校から英語をとってのは、大賛成。私男の子見てると、かわいそうだなって思うのが、話しませんよね。中学に入るともう思春期に入っているの。

(例 17)

Jw54：10 年くらい前に、韓国語、10 年前にちょっと興味があったのね。あ、言葉を何でも、どんな言葉でも一応知りたい。人が好きなので、その国の言葉が知りたい。なんでもあるんですね。興味があるのね。ポルトガル語でもね。(韓国語を)知りたいで始まったら、はじめたら文字で…。ところが1 年半前にドラマからはまって、それですぐに、いとしい彼のために。(注：この彼とは現在 Jw54 がファンである韓国の歌手)

(例 18)

Jw54：最初はフランス語と一緒にやっていたんだけど、韓国語のクラスがあがって同じ時間になっちゃったので、ピ(歌手の名前)さまのために韓国語を取りました。

Jw54 は、最初はフランス語、英語という言語に興味があり、両言語とも長く続けたようであるが、英語は別にしても最近アジアの言語に関心を持ち始めている。一方で日本人が言語を習うのは、まず英語であるという意識が強く表れているのが例 19 である。

(例 19)

Jw54：言語を習うことは、楽しい。楽しくて難しいですよ。ちっともしゃべれなくていらいらしますけど。でも楽しいですね。でもフランス語やった後の韓国語なので、フランス語ってほら、変化が、先生によくどうして発音もしないのに書かなくちゃいけないんですかって文句言うんですけど、ねー。それを思ったらもう韓国語は簡単ですよ、日本人には。ほんとにお隣の言葉だな、お隣の国の言葉。もう、こんなどうして小学校のうちから習わせないのかしらって思うくらい。

I：小学校から韓国語でもいいですか。

Jw54：うーん、選択で。でもやっぱり英語が話せるのがいいですよ。私、日本の総理大臣って話せなくて情けなくなるんですよ。内気。内気で。言葉がね。そのために蚊帳の外で。

(例 20)

Jw54：一般的なただの会話だと話す聞くでいいんですけど、ちゃんと考え方を伝えることだったら、読み書きもできるってことが。

(例 21)

Jw54：言葉はね、韓国語はそうですけど、英語で懲りたので、読むと書くからはって懲りたので。あんまり話す聞くが苦手になったので、フランス語のときは絶対やめようと思ったんです。で、やめようと思ったんですけど。で、フランスに行って、それで終わったんですけど、でもそれできちっと習い始めると、こうリエゾンするっていうところが、文字やらないと進みませんよね、韓国語もそうなんですけど。韓国語なんてほんとにきちっとしないと、口つむってるのか、ウンでも口つむっているのかどうなのか、リエゾンもできない、何もできない。両方やっていかないとダメなので。結局は読むも書くも両方やらないと前へ進まないなと思って。

Jw54にとって、席次についても習得についてもまず英語が一番に来る言語であるという意識は強いと思われる。この点が同じように多くの言語と接触した経験を持つ Jw53 と大きく違う点であろう。この意識の違いが生じる一つの理由は、日本語非母語話者とどこで接触したかであると思われる。Jw53 は日本での接触であるため、英語を共通語として使用するという環境ではなく、またはそのような意識が特に英語非母語話者にはなかったと思われる。したがって Jw53 が使っていた言語は英語に限られず、言語以外のコミュニケーション手段も用いている。一方、Jw54 はヨーロッパでの体験であり、日本以外の国に行った際の共通語となる言語として英語を選択し使用している。そして実際、英語が使えてよかったという経験から、Jw54 にとって日本語以外の言語としては、まず英語という意識が強くなったと思われる。

また習得の程度に対する意識も Jw53 は Jw54 に比べて規範が緩やかであると思われる。Jw53 にとってコミュニケーションに占める言語の割合は Jw54 に比べて低いと思われるからである。日本で交流した Jw53 は日本文化の紹介といった面もあって、料理や絵など言語に頼る程度が低いコミュニケーションも行っている。しかし例 20 や 21 から分かるように Jw54 は相手の土地での交流であるため、「ちゃんと自分の考えを伝える」という必要が生じやすい。更に一度は学校教育での読み書き中心の英語教育と反対の方法をとったものの、やはり読み書きもできなければ、「自分の考えを伝える」といった言語使用の目的を達成できないという意識を持っていると言え、必然的に必要となる言語の習得程度は高くなると予想できる。そのような場合、難しいという発言が出てくることも当然であろう。

5. 多言語使用者との比較と考察

予備調査と本稿における調査協力者(50代)の調査結果を踏まえて、多言語使用者と単言語使用者の席次と習得管理における規範を比較したものが、表3である。

表3 多言語使用者と単言語使用者の席次と習得管理における規範の比較

管理の種類	多言語使用者の規範	単言語使用者の規範
席次管理	①英語は重要で当然習得されるべき言語である。	英語は重要で、当然習得されるべき言語である。しかし、実際に習得行動までいく人が少ない。また席次の対象となる言語は英語だけではない。
	②言語はそれぞれに社会的機能がある	自身の言語がほとんどすべての機能を果たす
習得管理	③複数言語の習得	複数言語の習得はまだ一般的ではない。 (個人差が大きい)
	④言語の習得は特に困難ではない	言語の習得は難しい
	⑤それぞれの言語について習得の度合いについての目安を持つ	読む・書く・話す・聞く、のすべての習得を目指す(個人差が大きい)

基本的に多言語使用者の規範に対して20代で見られた違いは、50代の調査でも程度の差はあれ違いが見られたといえる。

まず席次管理の①については、今回の調査協力者は英語が重要であるという意識自体は持っていたが、その意識の程度は協力者によって大きな差が見られた。特に「当然習得されるべき言語」という点は、席次管理の対象となるという意味を含んでいる。実際英語を自身の席次管理の対象としていない調査協力者はいなかったが、はっきり英語を共通語として選んでいたのはJw54だけであり、そのJw54は韓国語の習得まで行っていた。またJw53は英語に限らずその時に必要な言語を習得していた。20代の場合、学校教育で英語の授業が行われていることもあり「英語」という点に注意が集中していると思われたが、将来習ってみたい言語という点では多くの他の言語が挙がっており、その点も考慮して「また席次の対象となる言語は英語だけではない。」との文を加えた。

次の席次管理の②については、今回の調査協力者全員が、自身の言語がほとんどすべての機能を果たすとしていた。これは日本社会の状況を考えると当然ともいえるだろうが、世代によってその理由は異なっていた。50代では日本語で生活していて不便があったかという質問に全員が「何もない」との答えであったのに対して、20代ではアンケート協力者64名のうち33名が「アルバイト先で日本語が通じなくて困った経験がある」などと答えていたからである。しかし、20代でも困ったという経験を持ちながら、学校の授業以外で言語の習得を行うという行動をとっていた協力者は少なく、このような経験は個人としてはまだ積極的に習得行動にいたるほどの大きな問題であると捉えていない可能性がある。

習得管理については、③と⑤ともに個人差が大きく、予備調査の結果と比較しても変更するには至らなかった。まず③については、席次管理の②との関係が深いであろう。今回の調査協力者は全員が学校で英語教育を受けているが、学校教育終了後の英語やその他の言語の習得については個人差が大きかった。ただ50代の協力者全員が、「将来は英語の習得がかならず必要である」という主旨の発言をしていることから、協力者(の世代)にとっ

ては複数言語の習得は一般的ではないが、将来は一般的になるであろうとの意識を持っているだろうと思われる。20代でもアンケート結果では「英語の習得は必要である」という回答がほとんどであったが、実際に学校の授業以外で言語の習得を積極的に行っていたのは少数であった。ただしインタビューの協力者5名のうち3名は授業以外で英語の習得機会を持っていた。⑤についても個人差が大きかった。特にJw53については、多くの言語に接した経験はあるが、特に言語の習得に力を入れたというよりも話す・聞く能力に中心を置き、日常の行動を共にすることでコミュニケーションをとっており、Jw53としては言語の習得程度に対し目安をもっている様子が見られた。一方、Jw54は読む・書く・話す・聞く、のすべての習得を必要とみなしていた。20代でのアンケートでも、言語の習得とは話す・聞くという2つであるとする意見と、4つすべての能力であるとする意見が多い。この点については今回の調査では明確とはならなかった。

④については、言語の習得は難しいという意識はほぼ全員に見られ、変更の必要はないと思われた。④については、日本語非母語話者の多言語使用者が日本語を習得する場合どのような管理を行っているかについて石田(2007)で述べた考察を参考にしたい。石田(2007)では、多言語使用者の習得管理の特徴の一つとして、日本語の習得に対して軽い気持ちがある、ことを挙げた。多言語社会における多言語使用者は普段から多くの言語に囲まれているため、新しい言語に対する抵抗感が少ないと考えたからである。今回もたとえばJm51は英語の使い始めには抵抗があったと述べていたが、ある程度の期間触れていることによって、その抵抗が薄れていく態度がうかがわれた。これは20代も同様の態度であった。ただ、多言語使用者と比較した場合、より軽い気持ちで習得を始めているとは思われなかった。言語の習得については20代を含め難しいと実際に述べた調査協力者が多く、また多言語使用者とのインタビューでは、「話すのが怖い」といった意識は出てこなかったからである。

6. まとめ

本調査では、単言語使用者の席次管理と習得管理の特徴について次のようなことが分かった。

まず席次管理の特徴であるが、対象とする言語に対して幅広い選択肢を持っていることが明らかとなった。今回の調査協力者が席次管理の対象とした言語は、英語はもちろんであるが、必ずしもそれだけではない。英語は共通語であるという認識は、全員が共通して持っていると思われたが、英語が公用語、もしくはかつての公用語であったシンガポール、マレーシア、フィリピンと比較して、その席次に占める重要度や地位は弱いと思われた。英語が共通語であるという認識は、例えば学校教育の場での教科として、または公共の場所や電波等、マスコミなどから流される情報から得たものとしてあるものの、日本語の支配が優勢な日本社会においては、実際に英語の共通語としての機能を活かす機会に乏しく、経験の裏打ちがないため英語に対する管理が弱まることが理由の一つとしてあげられよう。そのため他の言語への関心も向きやすく、席次管理の対象言語の選択肢が広がる

結果になると思われた。席次管理は、他の管理に比べて言語管理の方針を定める大きな管理であるといえるが、単言語使用者の個人言語管理にあっては、どの言語を席次管理の対象とするかの規範は柔軟度が高いと言える。この点は、国・政府レベルの席次管理の強さとその席次管理が他の管理に及ぼす影響の強さを考えた際に大きく異なる点であり、「個人言語管理の概念」2を裏付ける結果であるとも言える。

習得管理の特徴としては、言語の習得の目安よりも、使用頻度と習得の必要性により重点が置かれている点が挙げられる。席次管理についても述べたように、使用頻度、すなわち使用経験は実体管理と習得管理に大きく影響する。習得の必要性を感じていてもそれが経験を伴わない場合、使用するある特定の場面が出現した場合初めて習得の必要性が生じ、席次管理の対象言語となって表面化するのではないかと思われた。この習得管理の特徴は、言語管理における管理間の関係性にも影響する。国・政府レベルの言語管理は席次管理がはじめにあり、その後実体、習得などの管理が決まるが、個人言語管理においては席次管理と他の管理の関係が必ずしも国・政府レベルの管理とは同じでない可能性が考えられるからである。

いずれにしても今回の調査では単言語使用者の個人言語管理の規範について、結論を出すには量的にも質的にも限られている。しかし、今回の調査を、単言語使用者および多言語使用者の個人言語管理の特徴をさらに明らかにし、かつ個人言語管理の概念をさらに深めていくための一つの段階としたい。その上で、さらに調査を積み重ね、個人言語管理についてより詳しく探っていきたい。

参考文献

- 石田由美子（2006）『多言語状況下における個人言語管理—シンガポール、マレーシア、フィリピンの場合—』桜美林大学大学院博士学位論文
- 石田由美子（2007）「多言語使用者と単言語使用者の言語管理」日本語教育学会予稿集（パネルセッション）
- 井上史雄（2001）『日本語は生き残れるか』PHP新書
- 渋谷勝己（1992）第9章 言語政策、『社会言語学』おうふう pp.159-183
- ネウストプニー、J.V. 1995「日本語教育と言語管理」『阪大日本語研究』7 大阪大学文学部日本語学部講座 pp.67-82
- 野村敏夫（2006）『国語政策の戦後史』大修館書店
- Cooper, Robert L. (1989) Language planning and social change. Cambridge University Press.